

『乳幼児期の心の発達』

～愛着形成と愛着障害～

平成 28 年 11 月 5 日

「子どもの関わりを考える会」資料

バオバブ保育園 中島喜伸

引用イラスト：イラストレーターわたなべふみ

1. 愛着とは

愛着 (attachment) アタッチメントとは・・・Bollby 概論。

何らかの危機に接したとき、あるいは危機が予期された時に生じる恐れや不安などのネガティブな情動を、特定他者に対する近接性の確保を通じて制御・調整しようとする行動傾向。

泣けば必ず大切な人が来て、問題を解決してくれる ⇒ 人への信頼感の芽生え。

『愛着』＝『人を信じる力』 つまり…「人間の根本」ここが揺らぐと、その人の人間性が歪んでいく。

★基本の愛着対象は母を示すが、他者が代理をすることはできる。(保育所の大きな役割)

2. 愛着形成のしくみ

1) 胎児から出生

① 胎児のころ

本来、胎内は子どもにとって安全な環境である(栄養・温度・心音・羊水)

➤ 子どもは“へその緒”を通じて全ての生命源を得る。

親の食事や習慣(当然毒物も入る)、ストレス、胎児期の声掛け等々…安全であるはずの胎内も、親の状況次第で非常に危険なものに変化する。

➤ 喜ばれる妊娠だったのか…

望まない妊娠、喜ばれない妊娠により、子どもは産れながらに危険に晒される。(要支援)

② 赤ちゃんにとっての出生とは

人間の出生は、生物的に超早産と言われる。(赤ちゃんは1人で生きることができない)

- ・ 気温調整、自己呼吸、栄養摂取… 体内から出た瞬間に子どもは危険に晒される。
- ・ 「独立した赤ちゃんはいない」「いるのは母親と一対の赤ちゃんである」(D.W.ウィニコット)

➤ 生まれた瞬間に、お母さんの胸の上に置く。(最近の産婦人科で出産時に行う)

- ・ 赤ちゃん… 胸の暖かさ、お母さんの心音で安心を感じる。(胎内に近い感覚)
- ・ お母さん… ああ可愛い、育ててあげよう。(オキシトシンが脳の中にでる)

③ 赤ちゃんは泣くことが仕事

赤ちゃん…泣くことが仕事 (泣く = 赤ちゃんが生き抜くためにできる、唯一の手段)。

➤ 赤ちゃんの泣き声は、人間が一番嫌いな音。(生命危機反応による危険音)

聞かせないといけなと思わせる音。(嫌な感情が沸き起こるのは自然なこと)

➤ 「泣く」ことで、生命維持機能を補てんする。

「栄養」「清潔(不快)改善」「睡眠」等を親に求める。

➤ 交感神経(興奮)と副交感神経(鎮静)の役割。

赤ちゃんには、交感神経しか備わっていない。親が副交感神経の役割を果たす。

赤ちゃんが泣く ⇒ 母が抱っこし、鎮め、副交感神経のかわりをする。

(スイッチ ON)

(スイッチ OFF)

* おっぱいもたくさん飲んで、「もう十分でしょ」と止める等も同じ。

お母さんを通じて行動・感情のコントロールを行う。このやり取りが、感情調整の基礎になる。

★人の子を育てる、母に代わり愛着対象となる“保育”という仕事はとてつもなく重く・凄い仕事!

2) 『生きていだけでOK』の世界

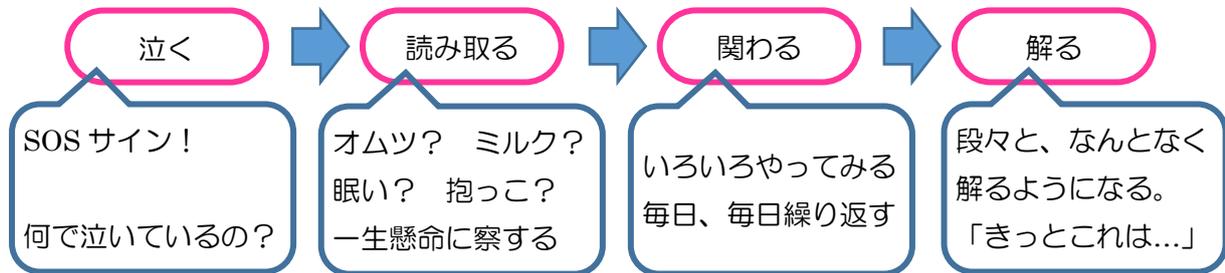
➤ 赤ちゃんは、ただそこにいるだけなのに…

『かわいいねえ』と声をかけられ、撫でられ、抱っこされる。

➤ 赤ちゃんは、ただ泣いているだけなのに…

お母さんは、言葉をかけながら一生懸命に何か（ケア）をしてくれる。

何で泣いているか解らないのに、お母さん子どもの状態から読み取っていく。



- 母親にしか解らない… そんな、感覚が生まれてくる。

- ♥ 母と同じ現象が、保育士にも起きてくる。 この感覚がつかめる人は、腕のある保育士さん!

*一方的な決めつけや、悪い事ではなく、困りごと（不快）を理解できるかという視点。

沢山褒められ、撫でられ、大事にしてもらえる（察してもらえる）。

そうすると、子どもは…

『自分は、この世界に生まれた事を認められ、喜ばれるべき存在なんだ!』

『生きていて良い存在なんだ!』『自分は必要な存在なんだ!』

沢山泣いて訴えて、喜んで関わって貰えることで、生きる事への自信を持つ（自己肯定感）。

- ★保育士が母とは違いすぎる対応をすると、「私のこと嫌い?」と、不安ばかり感じる子になってしまう。

*子どもの前での子どもの悪口や親の悪口などのネガティブな情報も同じように伝わってしまう。

3) 「人を信じる」世界

➤ 快・不快の関係



- 泣けば必ず大切な人が来て、問題を解決してくれる ⇒ 人への信頼感の芽生え。

「人を信じたい」「人に期待したい」「自分は捨てたもんじゃない」そんな感情の芽生え。

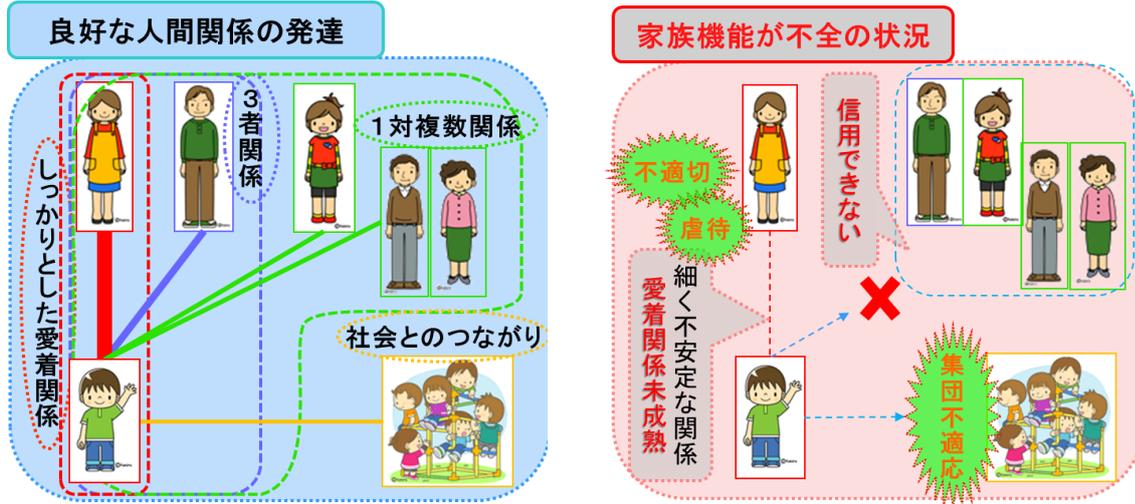
～心地よい体験（快体験）～ （愛着形成のキーワード、Here now）

すぐに、十分に、無条件に、裏表なく、繰り返し何度も必要なものが与えられる。

『生きていて良い自分』 ⇒ 『人を信じたい自分』 これが基本的信頼感の構築。

4) 愛着形成が大事な意味

人は1対1の愛着関係を軸に社会と繋がっていく。



★『集団に入ると不適応を起こす』のであれば、2者関係や3者関係に戻り、育ちなおしを行う。

- 子どもの愛着形成を保育園（士）が担う理由。（保育における『養護』）

保育園に入所している子の生活リズム

7:00 8:30

17:30

21:00

睡眠	家庭 (1.5h)	保育園 (9h)	家庭 (3.5h)	睡眠 (10h)
----	--------------	-------------	--------------	-------------

- 実際に子どもに関わる時間は保育園が最も長い。特に養育は“親の問題”だけでは済まされない。

母の代理として、**保育士（園）が愛着対象を担う**ことで、子どもの成長を保証できる。

- 保育園の中で、愛着対象の保育士ができ、そこを中心に他者との関係が結ばれていく。
特定の保育士 ⇒ クラスの子ども達 ⇒ 他のクラス・クラス以外の保育士

5) 人見知り・場所見知り（6～10ヶ月頃）

- 人見知りとは… ⇒ 自分にとって大切・安全な人と、そうでない人を分ける（知らない人＝怖い）。
- 場所見知りとは… ⇒ 自分にとって安全で安心する場所と、危険を察知する場所を分ける。
- * 人見知りが強すぎる：分離不安や見捨てられ不安の可能性。
- * 人見知りが全くない：愛着形成ができておらず、のべつまくなしに人に接近する、あるいは拒否。

ちなみに、人見知りの6～10ヶ月頃は～

お母さんは、今までの夫婦の生活リズムが赤ちゃんのリズムにかわる。

（自由に外に出られない、夜泣きに起こされる、泣き声にうんざり…）

⇒ この時期に、お母さんは先が見えない、強い不安や恐怖に襲われる。

お母さんが、赤ちゃんに疲れる頃、この“人見知り”はやってくる。

- 赤ちゃんは…お母さんに「私には、あなたしかいないのよ」というメッセージ。
- お母さんは…「やっぱりこの子には私が必要」と万能感が掻き立てられる。
お母さんにしかできないこと ⇒ 母としての“**自信回復**”がなされる。

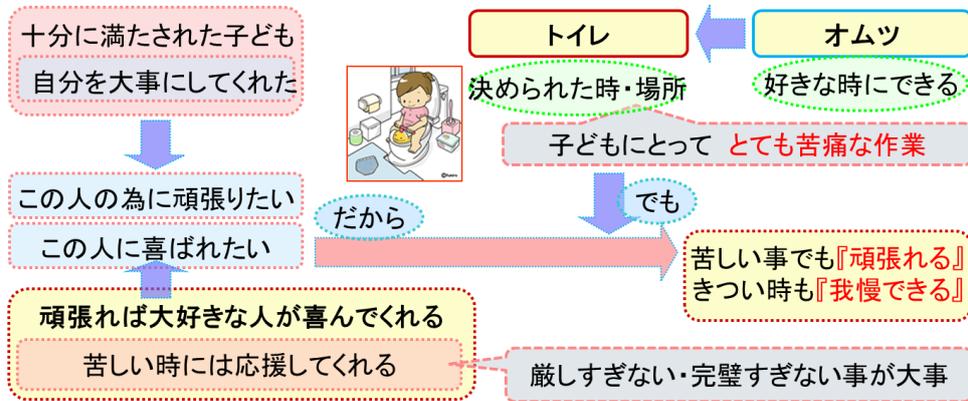
6) 自律性の芽生え（乳児期～2歳前後）

自律性 = 自分を調整する力（始めは母を使って調整をし、いずれ自分で調整できるように）

*アタッチメントは依存性ではなく、自律性を育むもの。適度な欲求不満・ネガティブな情動経験（マイルドなフラストレーション）が、子どもの自律発達の鍵。（要：十分な満足感と人への信頼基盤）

自律性の芽生えにおける初めての体験はトイレトレーニングと言われる。

➤ 人のために、自分が我慢する体験（応援されて育つ。叱って“させて”も人間性は育たない）。



嫌な事を乗り越えられるのは…

- 大好きなお母さん・先生が… 自分が頑張れば、「喜んでくれる」「応援してくれる」。
- 大好きなお母さん・先生を、喜ばせたい… だから嫌な事も「頑張れる」「乗り越えられる」。

厳しい躰、完璧すぎる母だと…

子どもは期待に応えられず、折れてしまったり、気にしすぎる様になったり…

- 叱って育てると、子どもは…「大人の機嫌を伺ったり」「必要以上に気を遣う」「神経質」になる。
* 善悪などの事の本質ではなく、先生が怒るか否かで判断してしまう（独裁者の一虐待下と同じ）

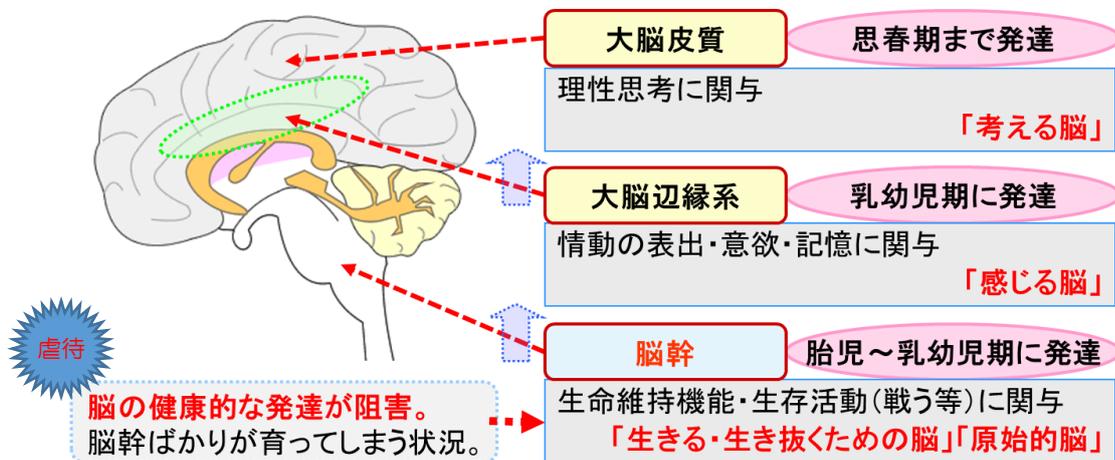
★『成長とは、様々な“喪失体験”を乗り越えるなかで達成される』

おっぱいをやめるのも、おむつを外すのも、保育園に行くことも、成長には喪失が存在する。

★“喪失体験”を乗り越えるためには、周囲の大人がしっかりと支えることが必要。

3. 脳の発達の仕組み

1) 脳の発達（臨界期）



★生命の維持（安全）と情緒の安定（安心＝よりどころ）が絶対基本条件。（養護）

★5領域に基づく5感に訴えかける体験（教育）が、脳発達を促す。

4. 愛着のゆがみ

1) 愛着障害とその特徴

愛着障害とは愛着形成（段階）のどこかが不十分であったり、不適切であったりした際に表出する。

* 愛着障害とまでは言えなくても、愛着形成が不安定な子どもは情緒・行動面に問題を呈する。

● 愛着障害 (ICD-10)

- 小児期の**反応性愛着障害** (F94.1 Reactive attachment disorder of childhood)

強い警戒心を持ち、人を信用できないが故に、近い人に対しても自分の気持ちを素直に出せず、裏腹な行動をとってしまう。

- 小児期の**脱抑制性愛着障害** (F94.2 Disinhibited attachment disorder of childhood)

人との距離感が解らず、初対面でもベタベタとくっつくなど。親しくなると過剰な要求や、人への危険認知が乏しいなど、大切な人を創れない状況になる。

乳児・幼児、社会的関係パターンに持続的な異常を示し、その要因は、**親からの無視・虐待、あるいは深刻な養育過誤の直接的な結果**である。

特徴として、下記の4つが示されている。

- ① 情緒障害を伴い、周囲の**環境変化に反応**する。
- ② はげましても効果がない恐れと**過度の警戒**がみられる。
- ③ 友だちとの**社会的相互交流が乏しい**。
- ④ 自身自分や他人への**攻撃性**がみられる。

2) 特徴的な行動

「愛着の絆」が十分に結べないと…『**自分のイライラや不満を抑える力に欠ける**』『**対人関係が築けない**』
特徴における6つのこと（発達障害に似た症状を呈す。そのために間違えられやすい）

① 『感情面』

孤独感や疎外感を持っている、緊張が高くいつもイライラし抑制できない、一度泣きだしたらなかなか泣き止まない、かんしゃく（パニック）を起こしやすい、ムラツケがある・怒りっぽい心から楽しんだり喜んだりできない、未来に絶望を感じている、生活の変化に弱く順応ができない

② 『行動面』

過度の刺激を求める、権威のある人に攻撃的・挑発的である、反社会行動が目立つ、破壊的行動をする衝動や欲求不満に自制が効かない、自分のしたことに責任が持てない・責任転嫁をする、他虐的で弱い者に残酷である、多動である、自虐的で自傷行為がある、暴食・過度の偏食・座って食べられない

③ 『思考面』

自分に自信がない、どうせムリと考える、新しい事やリスクが多いことは避ける、年齢相応ではない忍耐力・集中力が低い、因果関係がわからないため常識が通用しない、パターンに固執する

④ 『人間関係』

人を信頼しない、人の愛情を受け入れられず・自分も与えない、倫理観の欠如から両親が育ててない見ず知らずの人に愛嬌をふりまく、平気で他虐行為を行う、自分の間違いを人のせいにする、人の目をみない・見られるのを嫌がる、共感性にかけ、同年配の友達ができない

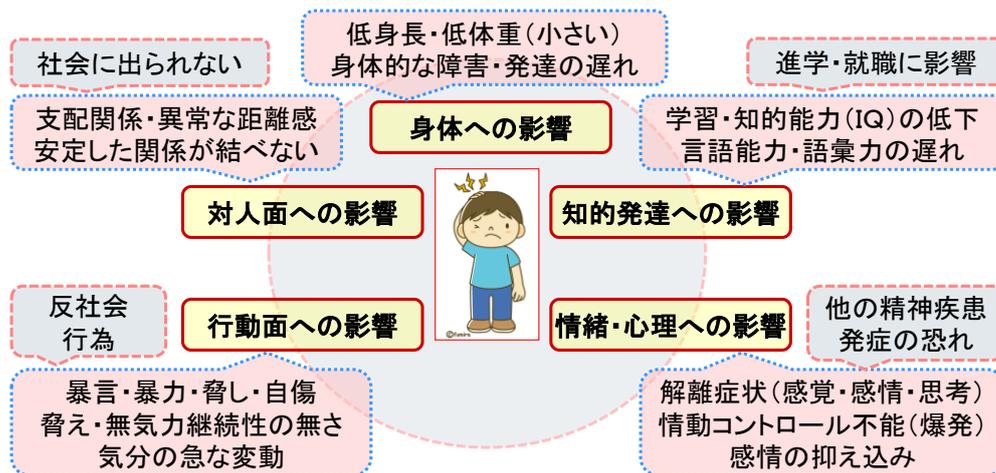
⑤ 『身体面』

身体発達が未熟で小柄、痛みに強い、触られるのを嫌う、非衛生になりがち、ケガをし易い

⑥ 『道徳面・倫理観』

自分を悪い子だと思う、悪い人・事に魅力、後悔や自責の念がない、愛することができないと思う

3) 児童虐待による影響（子どもの状態）



特徴の補足

- 表情の乏しさ、喜怒哀楽の方より等。
- 集中力の著しい低下、多動。ストレス体制の低下。
- 新奇場面や失敗体験への強い拒否。
- 相手の気持ちを考える力や状況や場の空気を読む力の欠如。
- 対人緊張の異様な強さ、顔色を伺う言動、損得勘定の対人関係。

例) 人見知りが無い。知らない人にも突然ベタベタと寄っていく。

例) 「分」がわりで感情が激変する。(さっきまでニコニコしていたのに突然怒り出す)

例) 大人が近づくと身体をこわばらせる、手を差し伸べると「ピクッ」とする。

例) 別の子どもを叱っていると、突然“良い子アピール”を始める。

例) 権力者には媚び、弱者を徹底していじめめる。

例) 悪い事を叱ると「何で俺だけ」と返す。逆に怒らせようと“挑発”をしてくる。

例) バれていても絶対に“否”を認めない。とことん嘘をつき続ける(重ねる)

虐待ではなくても、行動が似ることがある。

- 兄弟が多い家庭や家族に発達障害や精神障害の**未治療**が認められる場合、子どもの言動に影響が与えられることがある。(生存競争や問題回避)
- 離婚や死別などの強烈なライフイベントがあると一過性に表出する。

4) 愛着障害と保育所

保育は『**養護**』と『**教育**』である。この『**養護**』こそ、**愛着形成(安心と安全)のことである**。つまり、保育所が愛着形成の一端を担うと共に、愛着の修復を行う場所であると考える。

* 愛着障害と言えないまでも、“手のかかる”子どもは愛着の脆弱性を抱えていることが多い。

* 発達障害そのものが問題になるよりも、この愛着の問題が絡みややくしくなっていることが多い。

♥ **発達障害は特性なので問題ではない。むしろ対応や環境による不適応… つまり保育所の問題。**

『愛着障害は早ければ早いほど回復は早い』

「お母さんまたはそれにかわる世話人(つまり保育士)の関わりが重要。

16歳までであれば、80%の子どもたちが回復するといわれます。」ヘネシー澄子

★**子どもの全人的な発達(愛着障害の治療)は、保育所が早期介入の場所であり、最後の砦!**

♥ **誰か一人でも、その子の事を理解しようとしたか、関係を結べたかで将来は変わる!**

5. 愛着再形成への道筋

1) “問題となる行動”の捉え方。

『**誰が、何で問題と感じているか**』が重要。*その行動で困っているのは誰？

- いう事を聞いてくれないから、保育士が困っているのか？
- 失敗ばかりして、どうすればいいか解らず、子ども自身が困っているのか？

“**問題行動**”の考え方。(行動療法)

『問題行動』とは…

- **学習をしていないが故にできないもの(未学習)**
手段等を学習することで解決できる行動(“しなくて良くなる”)
- **誤って学習したもの(誤学習)**
学習をし直さないと解決できない行動。(行動の消去と学習のし直しが必要)

2) 記録のとり方

記録は客観性が重要。*記録の約束ごと。

- 記録を書く際は振り返らず、感情を込めず、『**起きた事柄を、時系列で記載**』する。
- 問題となる行動は「感覚」ではなく、**数やパターンで把握**する。
例)「いつも」「噛み付く子」ではなく、「1週間に〇回」「どんな時に噛み付く」など。

基本的な記録の書き方は『5W1H』。

『**いつ・どこで(どんな状況で)・誰が・どうした(何をした)
誰が(どう考え)どう対応して・その結果どうなった**』

When…いつ Where…どこで Who…誰が What…何を How…どうした
Why…なぜ(これについては感情的になりやすいので、確実な時のみ記載する)

3) “行動観察”の仕方

① 行動観察の意味

“問題となる行動”が繰り返される場合は、対応の問題。だから行動観察を行う。

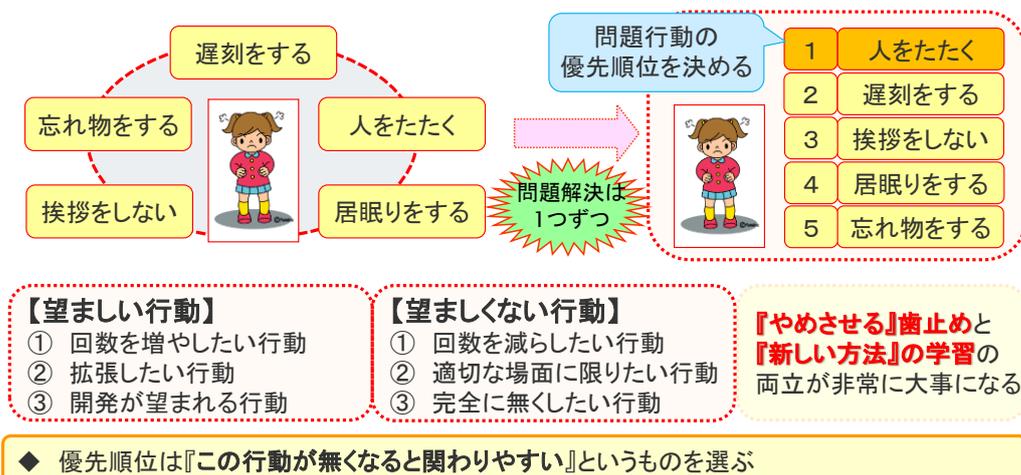
行動観察は子どもの“困った行動”“気になる行動”に焦点をあてて観察すること。

- **特定の行動にターゲットをおくことで、その行動の規則性を捉える。***規則性=どんな時にどうなる。

② ターゲットとなる行動の決め方

基本は「なに誰が困っているか」の視点。

* “問題となる行動”は「1つじゃない」ことが多い。(悪循環故に)



③ 行動観察

- 行動に注目せず、『手がかり』を探す。

子どもの行動を『Aの時にBがおきて、Cになった』という行動の見方

A	場面・状況 (手がかり)	どんな時	お集まりの時
B	子どもの行動 (行動)	どうした	立ち歩き
C	こちらの対応 (行動の結果)	どうなった	K先生に怒られた

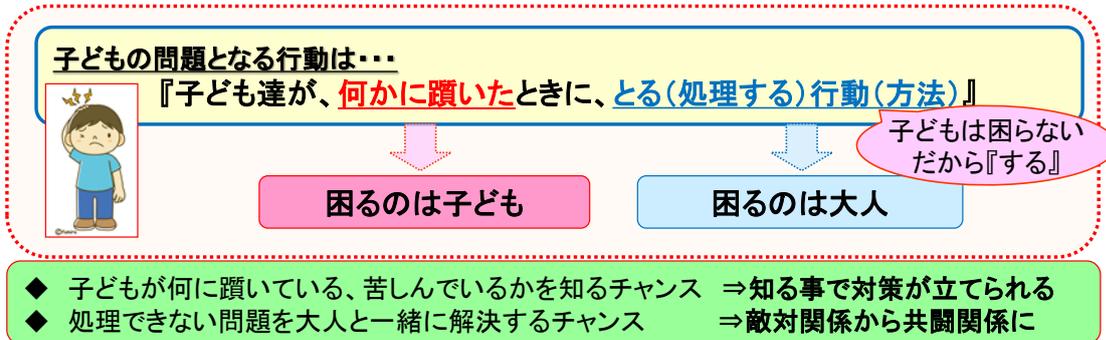
- 子どもに“怒り”が生じやすい時。
子どもの行動に保育士が疲れたり、行動をストレスに感じてくると、子どもの嫌な所ばかり目に着くようになり、子どもに怒りが向きやすくなる。

観察ポイント！

- 何ができていて、何ができていないか。
- 得意・苦手な、場面・事は何か。（この子の良いところと悪いところ）
- できていない事がどこまでならできるか。
- 問題となっている行動は何か。（具体的に何が問題なのか）
- 問題となっている行動はどんな時に起きているか。
- 同じ場面でも問題を起こさずに過ごせた時は無いか、それは何故か。
- 問題を起こしても切り替えた時はないか、どうやって切り替えたか。

④ 子どもの「困った」行動の考え方。

対応が難しい状況が起きた時は「誰が、何に困っている」のか考える。



大前提：『先生のいう事を聞けない』から『悪い子』『問題な子』ではない。

未満児は、グジグジしたりして『手がかかる』から『問題な子』ではない。

* 保育士が“問題な子”を創り出さない！

- “その子”ではなく、“行動”に焦点をあてる。（問題を明確にする）
 - 何の行動が問題か、その行動は何故問題かを子どもにきちんと説明できるか。
 - * 「ルール」や「そういうもの」という感覚は伝わらない。
- 対策は“何をどうするか”を具体的に考える。
 - 『何がどうなれば良いか』の目標を具体的にする。
 - 問題を繰り返す子に「次からやめる」など、できない目標・約束をしない。
 - * “できない約束”を「守らなかった」と責めることは絶対にNO！

⑤ 行動の状況（前後関係や流れ）が把握できたら、いろんな視点で考えてみる。

● 子どもの行動に『“何で” こうするのだろう』と、常に考える癖をつける。

行動の検証ポイント！（何でできないのだろう…？ 何で繰り返すのだろう…？）

● **能力的な要因を考える。**

指示ややりとりが年齢相応か、知的能力や発達障害的な要素の視点。

● **体調的な要因を考える。**

体調が悪い、眠い、腹が減った、寒い・暑い等の他の不快感がないかの視点。

● **自分のすることやこれから起こる事を理解できているか考える。**

新奇場面や、流れ（先行き）が見えないことで不安になっていないかの視点。

● **集中できる状況かどうかを考える。**

うるささや、環境的な刺激、集中できる時間的な感覚の視点。

● **指示自体を理解できているか考える。**

言葉や文が解りやすいか、難しすぎないか、課題が多すぎないかの視点。

● **知らない・できないのではないか考える。**

感情表現の仕方を「知らない」「発達的にできず」、違う方法で表現している視点。

● **純粋に腹が立ち、怒っているのか考えてみる。**

「なんで僕だけ」「バカにされた」「人格を否定された」事に怒っていないかの視点。

● **不安や気になることを抱えていないか考える。**

“今”とは別の理由で、気持ちが落ち着かない状況になっていないか考える。

● **過去の体験や記憶が影響していないか考えてみる。**

前に同じような状況で嫌な想いをしていたり、嫌な事を思い出していないかの視点。

● **本人なりの工夫（回避行動など）ではないか考えてみる。**

自分なりのやり方で落ち着こうとしていたり、感覚過敏を回避していないかの視点。

6. 子どもへの具体的対応

1) 子どもと向き合う前に

① 子どもは保育士を選べない。

保育士は子どもにとって『絶対的な権力者』であることを忘れてはならない。

滅茶苦茶な保育士でも、子ども達はこの事を聞かざるを得ない。

- 言語や知識が未熟なため、間違っていることが指摘できない。
- いう事を聞かなければ、子ども達はこの場（保育園）を生き延びられない。せめてもの抗議として、“反抗”や“言いなりにならない”という方法で示す。

② 子ども対応の鉄則事項

● **子どもの人権を尊重し、絶対に人格否定を行わない。** “暴力行為は言語道断！”

子どもを馬鹿にする発言、嫌味、差別等、心理的虐待に値する行為を行わない。

● **“自尊心の低下”を意識して対応する。**

子どもを追い詰めない、子どもが恥をかくような対応をしない。

● **親の前で「できない対応」をしない。**

親に「見られても堂々できる」対応を心がける。（子どもの前で嘘をつかない）

● **“私”（保育者）がどうかではなく、子どもにとってどうか、周りが見てどうかを考える。**

『自分はこう思う』だけでなく、『その結果』がどうなっているかを確認する。

2) 基本的な子どもの対応方法（障害の有無に関係なく幼児期に必要な事）

- **何をするにも、まずは“褒める” “認める” ことから。**（全ての基礎）
 - 子どもが問題を起こす時は、実は“褒める” ことが不足している事が良くある。
 - 自信が無い子ども（怒られ過ぎ）には、存在そのもの（ありのまま）を褒めよう！
- **1つ叱るためには、10褒める。10遊ぶ。**（叱るより、褒めることを先に考える）
 - 「沢山褒めてくれる、しっかり認めてくれる」だから、この人の言うことを聞く。
 - 沢山叱ってしまう子には、相当沢山褒めない子どもは潰れてしまう！
- **「ダメ」ではなく、「〇〇ならいいよ」という声掛け。**（ポジティブな言葉）
 - 「ダメ」だけだと混乱する。どうしたらよいか」を、丁寧に“教える” ことが大事。
 - お約束も「してはいけないこと」だけだと嫌になる。楽しい約束をつくろう！
- **具体的な指示や言葉かけをこころがける。**（何をしたらよいか明確にする）
 - 「ちゃんとしなさい」だと、抽象的過ぎて何をしてよいか解りません。
 - 「叩かない」「座りなさい」「しゃべりません」と具体的な行動を示す！
- **ルールや話（約束）は、単純明快が原則。**（短い時間で結論から言う）
 - どんな子どもに対しても、「短く」「解りやすく」が鉄則。
 - 一連の流れをする場合は、一つずつ教えパターン化することが大事！
- **気持ちはOK・行動はNO。**（例え失敗しても、気持ちは評価する）
 - 「叩きたい」はOK（叩きたい位、腹が立つんだね）、でも「叩たくのはダメ」。
 - 途中までできていたなら、頑張っていた部分を褒める。「惜しかったね、次ガンバ！」
- **人前で叱らない。**（本当に危険な場合だけ、人前で「〇〇をやめなさい」）
 - 叱る時は「他の子の目に触れない状況で、両手握り、目の高さを合わせて」叱る。
 - 人前で叱られると子どもには屈辱と怒りしか残らない。見せしめは絶対にNO！
- **発散して良い時間・場所をつくる。**（「ダメ」ではない場所を提供する）
 - “我慢をさせた” “何かをさせる” 分、エネルギーを発散して良い場面を提供する。
 - “落ち着かない子” には、「この場面は良いよ」「切り替えておいで」が効果的！
- **“繰り返す失敗” は子どもではなく保育士の問題。**（成長を促す工夫をする）
 - 子どもにできない状況がある時は、**子どもの目線で**支援方法を考えることが必須。
 - “できない” ことへの『怒り』に巻き込まれて、**悪循環を創らない**事が大事！
- **子どもにとって保育士がモデル。**（子どもは保育士の写し鏡）
 - 『〇〇な子』にしたいなら、保育士が子ども達に“〇〇” をする事を心がける。
 - 「話を聞ける子」にしたいならば、保育士が「子どもの話に耳を傾ける」。
 - 「落ち着いた子」にしたいならば、保育士が「落ち着いた雰囲気」をつくる。
 - 子ども達は『先生が“何を大事にする人” か』を見ていて、習慣化していく！

3) 愛着障害児への対応 point (虐待に限らず愛情飢餓(不足)の子どもに共通する)

① 愛着障害を受けた子どもの世界観

- 『私は要らない存在。何をやっても認めて貰えない』世界

虐待被害の後遺症だから…

『大人は誰も自分の事なんか解ってくれない』『人は信用できない』

(誰も助けてくれなかった。「ほら、やっぱり僕の事嫌いなんですよ」)

『世間から“間違い”と言われる事でも、僕はそう教えられた』

(“叩く”“荒い口調”…注意したくなる行動も、子どもは育てられた)

『人の気持ちが解らない』

(自分の事を考えてくれた人が居ないので、人の気持ちなんか解らない)

『常に過緊張の状態、落ち着いてなんかられない』

(いつ、どこで、誰が攻撃してくるか、常にソワソワしている)

『解らない、できない事は誰よりも苦しい』

(今を生きる事で精一杯だから、見通しが解らないと怖くてたまらない)

『怖かった体験を鮮明に思い出す。感情を捨ててしまった』

(何をしても面白くない、よろこべない、生きていることが苦痛)

『怒られたって良い！先生が僕を見てくれれば』

(どんな方法でも、僕に注目してくれれば、僕は安心できる)

② 対応の point

愛着障害児の対応のキーワードは『失敗を責めない』『気持ちを代弁する』！

❖ 『虐待をする親と違う存在(大人)』に保育士がなれるか。

- 怒られる事が正しい養育だと誤認識しているため、保育士を怒らせようとする。

(「怒られる=愛情」という誤認識。「あなたの為に怒っている」は絶対NO)

- 怒らせることで関心を持たせようとする。(怒ることがあれば、関わってくれる)

★ 『愛着関係の作り直し』が最大のテーマ！

『どんな酷い虐待を受けたか』よりも、

『誰か一人でもその子の事を理解したか、気持ちを理解したか』が大事！

(「人を信用する力」があるかどうかで、その後の回復は大きく左右される)

- 脳の発達を考えれば、乳幼児期が、子どもの回復における最大の鍵。

③ 基本的な対応

◎ 虐待治療に必要なこと

- **トラウマの治療** * 保育園でトラウマそのものを扱う事は絶対にしない。

• 子どもの被害状況を理解し、トラウマを刺激しないように配慮する。(再暴露防止) 安心・安全。

- **自己イメージ・自尊心の回復**

• 「自分は要らない存在」という自己イメージの回復。「どうせ怒られる」という自尊心欠如の回復。

- **自己コントロールの習得**

• 自分の感情を理解する。(気持ちはOK、行動はNO)

• 感情に合わせた行動の仕方を学習する。(腹が立ったら〇〇をする)

- **対人関係の築きなおし**

• 虐待加害者とは、異なる存在として子どもとの関係をつくる。(親と同じ対応をしない)

◎ 愛着障害の子どもへの対応『4原則』

『基本的信頼感の構築』（自分は必要とされている、大事にされる存在）

・子どもに言われたこと（困りごと）は「今・すぐに」対応する。

⇒ 虐待行為は存在否定。「言っても、自分の事は認めて貰えない」世界。

- 困った問題をすぐに解決してもらえ。（解決困難でも動いてくれる）
- 自分の意見や想い、話を否定せずに最後まで聞いてもらえる。
- 問題を起こした時は、気持ちを理解してくれる。

・約束したことは絶対に守る。

⇒ 大人は「嘘をつく」「自分勝手である」「泣いても助けてくれない」世界。

- 「裏切らない大人」としての存在になる。
- 守れない約束はしない。できない事はできないとハッキリ伝える。

・見通しをつくる。

⇒ 虐待は大人側の気分で行われる。「いつ、自分がどうなるか解らない世界」。

- 今日の予定がどんなんで、どうなったら、次に何をすることが解る。誰に聞けばいいか解る。
- とにかく“解りやすい”ことが原則。（解らない = 不安 = 落ち着かない）

・大人が失敗したら、きちんと謝る。

⇒ どんなに大人が悪くても「お前が悪い」とすり替えられてきた世界。

- 大人も失敗するもの。失敗したら謝り、変えれば良いというモデルになる。
- 言い訳をせず、次からどうするかを説明し実施する。

4) 愛着障害の子どもへの具体的な対応

・まずは微笑みかけ、存在を認める。（存在否定や自尊心の低下をさける）

「何かしたから褒める」のではなく、その子自体をとにかく褒める。

Ex)「今日の雰囲気いいね」「今日の表情いいね」「いい顔をしているね」

- * 怒られる行動が多い為、良い事を探してもなかなか見つからない。
- * 実際には違っても『その気にさせる』ことで子ども達は十分に変わる。

（みんな「あなたは素質がある」「あなたはやればできる子」と言われてきた）

・目を合わせ、“聞く”事を意識する。（話しかける時のポイント）

話を聞いてほしい時、話を聞く時は…

子どもの目線になり（膝をつくなど）、二の腕を掴み（触れ）、目を見ながら聞く。

- 表情を読み取り、気持ちを代弁していく。
- まずは「どうしたの？」と聞く。その上で、「どうしたら良いか」伝える。

・難しい子ほど『抱きしめる』事をつかう。（喜ばれる存在の強化）

「可愛いね」「大好きだよ」と抱きしめる（男性保育士は頭をなでる）。

ポジティブなメッセージとして子どもに伝わる。

叱った後にも抱きしめる。

叱られると、子ども達の見捨てられ不安が増加する。（こんな僕の事嫌い…）

⇒ 悪いのは行動で、あなたが嫌いなわけではないよというメッセージ。

特に脅して、子ども達の見捨てられ不安を刺激し、支配関係をつくらない。

・失敗を責めない。気持ちを褒める、できたところまで褒める。

必ず失敗（間違っただ行動）をすると、認識しておく。

“間違っただ”は保育士感覚であり、子どもは“正しい事”と誤認識している。

⇒ 行動を否定されることは、自分の人生そのものを否定されること。

失敗の流れの中から、良いところを見つけ強化する。

Ex) 「腹がたって叩いた」

⇒ それは許せなかったね、悔しかったね。叩いたのだけまずかったね。

（どんなに問題な行動であっても、子どもの気持ちは受け止める）

Ex) 「途中まで集中してやっていたが、集中が切れて活動をぐちゃぐちゃにした」

⇒ 最後の行動はまずかったけど、途中までは本当に良く集中していたね。

私がもう少し前に切り上げさせていたら、あなたは切れなくてすんだね、私がいけなかった。

・困りごと（欲求）を丁寧に解決する。（乳児期の愛着関係作り直し）

子どもの“不快感覚”を、年齢に合わせて提供できる方法と一緒に解決する。

「困った時は好きな保育士に相談できる（助けを求められる）」関係にしていく。

・生活空間に工夫をする。（自分が大事にされていると感じる工夫）

➤ 自分の物、場所がしっかりとある。（特に名前があることはとても大事）

➤ 他児に脅かされない（侵入感の無い）空間がある。（私だけの場所）

➤ ルールや約束ごとは、できる限り少なく、守れる事を設定する。

・とにかく“解り易さ”重視をする。（解らない＝不安＝落ち着かなさ）

➤ 同じ生活リズムを繰り返す。（イレギュラーをできる限りなくす）

➤ 始まりと終わりをハッキリさせる。（メリハリをつける）

➤ これからの予定がわかる生活。（今日の動き、明日の予定、何がどうなったら、次どうなる）

➤ 困った時に、誰に何を言えば・聞けば良いか解る。

・刺激の統制を行い、失敗場面を減らす。（「しなくて良くなる」を増やす）

● 何度も繰り返す問題は、何らかの刺激があり、その刺激に反応していると考える。

不必要な刺激は無くし、必要な刺激は乗り越えられるように支援する。

一気にではなく、徐々に負荷をかけ、子どもの状況を見ながら調整する。

★ 刺激があっても「〇〇があれば（一緒にいれば等）、乗り越えられる」を探す！

ここでいう刺激とは…

・恐怖体験を思い起こさせるような、五感への刺激。（光・音・匂い等々）

＊状況描写が脳裏に浮かんでくる。（季節や行事等の思い出も引き金になる）

・虐待時と同じような扱いや感覚。（劣等感・疎外感・見捨てられ感・侮辱感）

・羨ましさや自分にはない物（事）に触れ、満たされない感覚が刺激された時。

・周りに他児が居る（集団）、他の人の目がある時。（私が守られるか不安）

・新しい事をする時、過去に失敗したものをやる時。（できない不安）

・じっとしている事を求められる時、暇な時。（苦痛を感じる）

- ◎ 刺激に反応するのは必然。（そうせざるを得ない状況にある）

メカニズム

危険に晒される ⇒ 警戒心が強くなる ⇒ 些細な刺激 ⇒ 過剰に反応する
* 虐待下では「いつ殴られるか」と常に脳が反応している。（慣れた環境）
・ その為に「何も無い安全」が逆に不安になってしまう。（慣れない環境）

- ・ **子どもの“怒り”の悪循環に巻き込まれない。**（病理性の問題）

虐待や不適切な養育を受けた子ども達は“怒り”に溢れている。

…大人から向けられた怒り、誰も信じられない怒り、上手くいかない怒り…

怒り＝養育・愛情 と認識している子ども達は大人に怒りをぶつけてくる。

- 虐待下の再現に巻き込まれないようにする。（ほら、あなたも一緒にしょ）

★ 鉄則は「問題を起こす前」「問題を起こしていない」時に関わる。

不適切な養育を受けた子どもはその状況を保育園の中で再現する

- ・ 身体的虐待 … 暴力を仕向けるようにしてくる、怒られて安心、強さ弱さにこだわる
 - ・ 心理的虐待 … 暴言を吐かせるように仕向ける、無視されるような行動をとる
 - ・ ネグレクト … ほうっておかれるように仕向ける、汚くても平気
 - ・ 性的虐待 … 人と性を用いて関係を築こうとする（遊びの中で再現される）
- 親と同様にさせるようとする ⇒ だから、保育士は親と一緒にの対応をしてはいけない。

- ・ **“私だけ”の特別感を上手く使う。**（存在証明）

「誰にも邪魔されない」時間や場所、特に特定保育士との時間を作る。

⇒ “私だけ”が十分に満たされると、そこに好きな友達を入れようとし始める。

⇒ そこでうまく行く体験をし、自身がついてくると、集団の中に入っていられる。

集団の中で行う特別対応の視点

保育所や学校等、集団場面の特別扱いは違和感があるが次の視点を持つと楽。

- ・ 個人の時間を保証しなければ、逆に問題がややこしくなる。
- ・ 今まで、不遇な想いを一人で抱えてきたのだから、これくらいあったって。

- 個別時間を作る時は、時間を固定しておく。（5、10分）
* はじめは終わりが見えると不安になるが、毎日繰り返すことで安心する。
- 面と向かうことは苦手なので、することを決めておく。（お手伝いでも良い）
* 但し、子どもがやりたいと思えるもの。（本当は遊びが良い）
- いつも、確実に、変わりなく、条件なしでその時間は保証し提供する。
* 愛着形成と同じ要領で実施をする。

★ 『個別対応』の保育士がつけられるのなら最高！

♥ どこまで育てて、どこから育てることが必要なのかの視点。（年齢ではなく育ち！）

- ◎ 「もっと、もっと」になり易いので、エスカレートは気を付ける（無益化）。

- * 嬉しくて興奮しやすいし、終わりがたくないので邪魔をしやすくなる。
- “私だけの人”に従事する。（他の子に行くとやきもちをやき、怒りが生じる）
- “監視役”ではなく、“サポートする人”になる。
* 解らない事があれば、先生が手伝ってくれる。

・**褒めても響きにくいことを理解しておく。**（虐待の後遺症）

子どもは本来、褒められるとセロトニン等が分泌され、報酬系回路に記憶される。

*報酬系回路：「こういうことがあると、こうなる」という記憶。

虐待行為症のメカニズム

（近年、海馬《記憶脳》だけでなく線条体《行動を促す脳》の影響も言われる）
裏切られ体験 ⇒ 誰も解ってくれない ⇒ 褒められても… 反応しなくなる

- ゆっくりではあるが、生活の安定と共に反応してくる。（だから褒め続ける）
- 嬉しすぎて、気持ちとは違う行動にでることがある。（ツンデレっぽく）

・**子どもの“劣等感”や“見捨てられ不安”をむやみに刺激しない。**

- “できない”ことはできる限りさせない。“できる”事をさせる。
⇒ “できない”と予測されることは、“できる”ように準備をする。
- 「もう知りません」などの、見捨てられ不安を煽るような言葉を使わない。
⇒ こども達は言わせるように仕向けてくる。（「どうせ嫌いでしょ」の世界）

・**難しい子と関わる時は、一人ではなくチームで関わる。**

子どもの脆弱性に伴う病理性に必ず振り回されるとしておく。（チーム作りが重要）

保育士や職員間での危険サイン（施設崩壊のサイン）

- 一日の中で、子どもを注意してばかりいる。（本人は気づきにくい）
- 特定の子どもの嫌な所ばかり目につき、良いところと言えない。
- 特定の子どもに“関わりたくない”“「お休み」だと嬉しい”と感じてしまう。
- 自分の「考えていた」ように“子どもができない”と妙にイライラする。
- 子どもができないと、威圧的に関わってしまう。（声が大きくなる等）
- 子どもに指示すること、叱ることが大事と考え行動している。（抑えなくては…）
- 周囲や保護者からの指摘があると、責められているように捉えてしまう。
- 自分のやり方に固執しやすい。（こうあるべき、経験上…と言いたくなる）
- 愚痴や保育に関係ない“お喋り”が、子どもが居る場所でも出てしまう。

● **保育所ではいろんな事がおきる**

保育所 = 慣れない・安心できない場所なので・・・

保育所で自分が**慣れ親しんだ方法**（安心する毛布）を展開し、**慣れ親しんだ対人関係**を結ぼうとする。

（知らない場所で知っている人が居たら嬉しい感覚）

- ◇ 叩く親であれば、私たちが叩かせようと仕向けたら。（叩くことが愛情と誤認識）
- ◇ ネグレクトの子は、関わりを意図的に回避したり、動物的な反応を示したり。
- ◇ 性的な関係に曝された子は、より密接な人間関係を求めたり。
- ◇ 見捨てられた感覚がある子は、見捨てるように仕向けてきたり。

自分に応えてくれる、求めている親像等を保育士に投影してくる（**転移**）

良い感情も、悪い感情も、子ども達がそれまで生きてきた世界観や、子どもの人間形成を行ってきた、大人側の感情にさせられる。（**逆転移**）

- 治療上起きてくる大人側の感情は、子どもの病理により巻き起こるもの。
- ※ 大人側の弱さが影響することもあるので要注意。
- 子どもの治療には**転移と逆転移の関係が絶対に必要**。（避けては通れない）

- 保育所で起こりうること

- 『この子を変えたい。この子の役に立ちたいという想い』

- ◇ 子どもの苦しさや、おかれた状況に曝され、子どもの気持ちが職員へうつる。
- ◇ 子どもが期待する“**万能感**”に職員は応えなければという想いになる。

- 『この子を自分が助けなければ、自分しか解らないという想い』（2者関係の埋没）

- ◇ 自分にしかできない“**優越感**”や秘め事などの“**特別感**”が増してくる。
- ◇ 無理難題・理不尽な要求が生じたり、大事な人ほど攻撃対象にしたりする。

- 『自分がこんなにしてあげているのに、何で自分の気持ちに答えてくれないのか』

- ◇ “愛情”が怒りに変わる瞬間。想いが強ければより、憎しみも大きくなる。
- ◇ 上手くいかないのは「周囲に同じ気持ちが無いからだ」。“**不信感**”が生まれる。（**担任のせい**）

- 『二進も三進もいかない、どうして良いか解らない』

- ◇ 子どもの“**見捨てられ不安**”に掻き立てられ、**葛藤**をする。
- ◇ 「解らない」「できない」を理由に回避をする。“**無力感**”にさいなまれる。

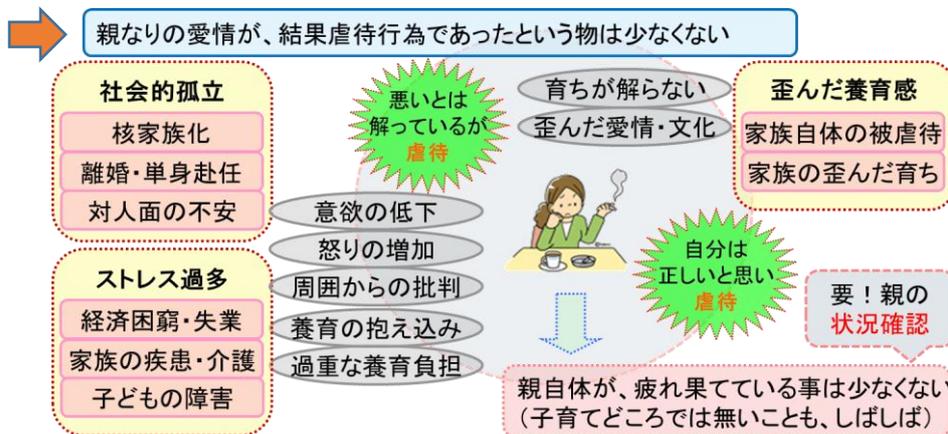
- 『この子がそうする、この子が悪いという思考に変化』（責任を転嫁・燃え尽き）

- ◇ 施設に来た時と同じ状況、結果になる。
- ◇ 職員の怒りの増幅がコントロールできなくなる。

7. 虐待等が絡むケースの保護者対応

1) 親の状況を読み解く

大前提：親が子どもを憎くて虐待行為を行っているケースは多くない。＊性的虐待は別。



★ 何故そのようなことが起きているか、どこに問題があるかをイメージする。

- 行為を否定したり、責めても解決にならない。

2) 親御さんの特徴に合わせた対応（基本の対応第4章3-1）と同じ）

- ① どんな親であれ、堂々立ち振る舞い、あっけらかんと対応する。
- ② 親の興味や感覚に合わせて話をする。（頭ごなしにしない）
- ③ 相手の抱えている問題をイメージしながら、話す。
- ④ 普段から親の困り観を聞く。（子育てだけでなく身の上話）
- ⑤ 親への気遣い、褒める事をする。
（「お母さん大丈夫？」「どう最近？」「なんか最近雰囲気いいね」）
- ⑥ 譲れない部分は理由も含め伝え続ける。
（「子どもにこうなって欲しい」と子どもの成長を真ん中において話をする）